

嘆きから祈り、そして賛美へ

詩編一三編

私はあなたの慈しみに頼り

私の心はあなたの救いに喜び躍ります。

「主に歌おう　主が私に報いてくださった」と。(6)

「いつまで」という言葉で始まる四つの疑問文によって、詩人は自分の苦しみを神に訴えています。大きな苦しみの中、彼は絶望することなく神に向かいます。たとえ状況がどんなに悪化しても、詩人は信仰を捨てることはしないのです。それは主の慈しみと憐れみは尽きることがないことを知っていたからです。心の目を神に向けたとき、詩人の心は大きな平安と喜びに包まれました。いつしか彼の口には神をたたえる賛美の歌があふれ出しました。これこそ信仰者の嘆きの姿です。「いつまでですか」と神に窮状を訴えながらも、祈りを通して神への信頼を新たにし、ついには嘆きが賛美へと変わるのです。主の慈しみは変わることがないからです。私たちも嘆きを包み隠さず神に訴えて良いのです。助けを求めて主に訴え続けるとき、その嘆きはいつしか神への賛美へと変わります。